

## 龍蛇様(背黒海蛇)から見える出雲の神迎祭と神在月

丸谷憲二

### 1 はじめに

出雲地方では出雲大社、佐太(さだ)神社、日御碕神社、神魂(かもす)神社、売豆紀(めづき)神社、多賀神社、朝山(あさやま)神社、神原(かんばら)神社、出雲大社北島家の「龍神講祭」と、「万九千(まんくせん)神社」でも、旧暦 10 月に、海辺に打ち上げられた背黒海蛇を神の使いとして奉納する神迎祭という儀式がある。暖流に乗って回遊してきたセグロウミヘビが、ちょうど同時期に出雲地方の沖合に達することに由来すると説明されている。出雲大社の社紋「亀甲紋」は龍蛇神・セグロウミヘビの尾に浮かぶ亀甲模様が原型とされている。なぜ、セグロウミヘビと神在祭という儀式が結びつくのか。龍蛇(りゅうじゃ)から見えてくる出雲の神在(かみあり)月と神迎祭(かみむかえさい)について考察したい。



出雲大社の神迎祭

### 2 セグロウミヘビと神迎祭

神迎祭は、国譲りの浜である稲佐の浜で、西の海から来るセグロウミヘビを捕らえ、出雲大社に持ち帰って執り行われる。「八百万の神たちが大社に参集されるについて、龍蛇様が大国主(おおくにぬし)神すなわちダイコク様の使者として大社まできた。泳いでくる龍蛇様を玉藻(たまも)の上に承(う)ける。」と千家尊統宮司(第 82 代出雲国造)は説明している。

#### 2.1 セグロウミヘビ

*Pelamis platurus* コブラ科。全長 50~80cm。背中は黒く、お腹は黄色く、尾は波型模様。腹面の黄色は色域の幅があり、褐色のものもいる。頭部は細長く、いびつな印象。ウミヘビの中でも一番遊泳に適した体を持つが、陸上ではほとんど移動できない。他のウミヘビと違って隠れる場所のない外洋で漂流生活を行うため、身を守る警戒色と説明されている。



Fuente: iBibo  
© Derechos reservados

### 2.1.1 セグロウミヘビの毒

人間を死に至らしめる強い毒を持っている。神経作用から起こる呼吸麻痺は治療が行われなければ致死的と言われる。肉そのものの中にも捕食者に中毒を起こさせるものが含まれているとの説もある。気も荒いため非常に危険である。なぜ、毒性のある海蛇を神の使いとして奉納するのが説明されていない。

### 2.1.2 セグロウミヘビの棲息地と出雲

太平洋からインド洋の低緯度地域に広く分布している。東部アフリカ、マダガスカル、アラビアとインド周辺。南東部アジア、インドネシア、日本、オーストラリア、ニュージーランドとエクアドルとガラパゴス諸島北からバジャカリフォルニアとカリフォルニア湾まで米州の西海岸に及ぶ。晩秋から初冬にかけて対馬海流に乗って、北西の季節風で海岸に打ち上げられる。南西諸島の海岸で嵐の日や、秋口の全国の海岸に死滅回遊の個体がストランディング（岸に打ち上げ）することがある。

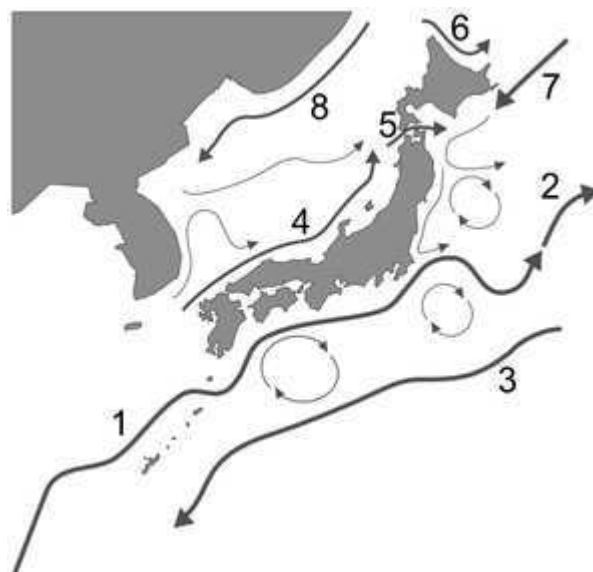


### 2.1.3 対馬海流

対馬海流（対馬暖流）とは九州西方沖に分布する黒潮系の水塊(水温・塩分などがほぼ同じ性質をもち、周囲の海水と区分できる海水のかたまり。)と、東シナ海の沿岸水が混ざり合った海水が対馬海峡を通じて日本海に流入する暖流である。

#### 日本列島近海の海流

- 1 黒潮
- 2 黒潮続流
- 3 黒潮反流
- 4 対馬暖流
- 5 津軽暖流
- 6 宗谷暖流
- 7 親潮
- 8 リマン（Liman）寒流



#### 2.1.4 敷石状の体鱗列数

ヘビの種類の識別として体鱗列数を使う。体鱗列数とは、主に胴の中央部付近で計測される。セグロウミヘビは、49-67 列。体鱗は非常に細かく、敷石状に並ぶ。



### 3 出雲大社の神紋 亀甲紋

出雲大社の神紋は亀甲紋である。古い手箱の散らし紋に「有」の文字が描かれている。亀甲紋は龍蛇神・セグロウミヘビの尾に浮かぶ亀甲模様が原型と説明される。

#### 3.1 神魂神社の亀甲紋の「有」

神魂(かもす)神社(島根県松江市大庭町)は出雲国府に近い古代出雲の中心地にあり、社伝では、天穗日命(アマノホヒノミコト)の子孫が出雲国造として 25 代までに奉仕したという。出雲国造家は現在は出雲大社の宮司家であるが、国造家の代替わりのときの「神火相続式」「古伝新嘗祭(こでんしんじょうさい)」は、明治初年までは神魂(かもす)神社に参向して行われていた。



神魂神社は「亀甲に有」が神紋である。有と言う字は十と月で出来ている。十月(神無月)は全国の神社は神様がお留守ですが、神魂神社は神様一杯と説明される。

### 3.2 佐太神社の龍蛇神



佐太神社(島根県松江市鹿島町佐陀宮内)ではセグロウミヘビを「龍蛇神」と呼び、全身を覆う鱗形を神紋「亀甲」としている。板橋氏(鹿島町古浦)は龍蛇上げを行う「龍蛇祝(りゅうじゃはふり)」という役職を明治まで世襲していた。

「龍蛇祝」は神領の佐陀浦と周辺の山を管理し、神在月の頃になると佐陀浦で龍蛇を見張り、浦人が龍蛇を上げ佐太神社へ奉ずる役である。

### 3.3 亀甲紋の神社



出雲の神社は全て亀甲紋である。重要なのは[亀甲]のみの神社である。佐太神社[亀甲] 能義(のぎ)神社[亀甲] 城上(きがみ)神社[亀甲]である。

[亀甲]の中に文字や記号が追記されている神社は工夫改善であり新しい。

出雲大社「二重亀甲に剣花菱」 神魂神社「亀甲に有」 美保神社[亀甲に三つ巴] 売布(めふ)神社[亀甲に花菱] 八重垣神社[六角剣花菱] 須我神社[亀甲に八つ雲] 玉作湯神社[亀甲に丸玉、菅玉、勾玉の組み合わせ] 多部神社[亀甲に剣] 阿羅波比神社[亀甲に大一] 櫛田神社[三つ

亀甲に五三桐] 巖島神社[三つ盛り 亀甲に剣花菱] 熊野神社[六角に大] 千家並びに北島家[二重亀甲に剣花菱]

出雲以外でも安芸の巖島神社が「三つ盛亀甲に剣花菱」、博多の櫛田神社が「三つ盛亀甲に五三桐」、常陸の香取神宮も「亀甲紋」である。

## 4 神在月と神無月

出雲は神々の国、八百万神が集う国、出雲の神在月は旧暦 10 月である。暦の上では 10 月は神無月(かなつき)である。出雲だけが神在月である。出雲に神が集うために、他の国では神がいなくなる。だからその月を出雲以外では神無月と呼ぶ。問題はこの神在月に神々は何をしに出雲に来るのか。何故出雲に集わねばならないかである。

### 4.1 出雲大社の神在月

出雲大社の神在月は大社と摂社上宮(かみのみや)で執り行われる。陰暦 10 月 11 日～17 日迄の 7 日間、境内の東西十九社は大社に参集された神々の旅社(たびしゃ)となる。上宮が会議所である。出雲大社の神在月が終わると佐太神社、最後は斐川町併川神立(あいかわかんだち)の万九千社(まんくせんのやしろ)から、神々は、それぞれの国にたち戻られる。出雲大社では神々のために神等去出祭(からさで)が行われる。

## 5 まとめ

① 何故、毒性のある海蛇を神の使いとして奉納するのが説明されていない。この答は、セグロウミヘビ(コブラ科)が出雲神の最も身近な海蛇であった。つまり、**出雲神はインド洋周辺の低緯度地域からの渡来人であると推定する。**



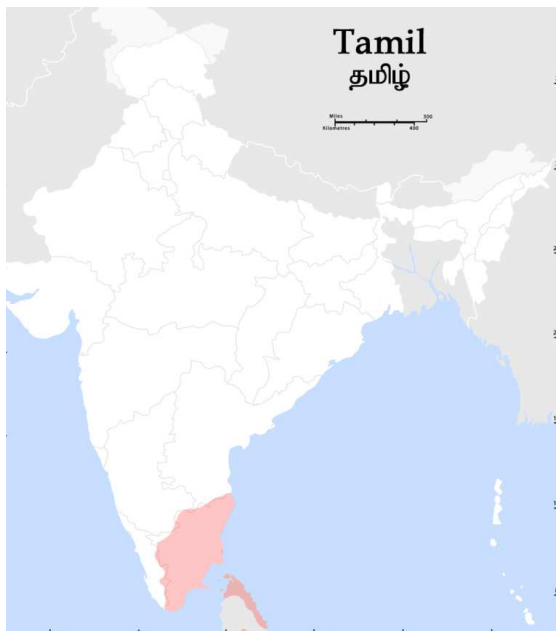
② 佐太神社のみがセグロウミヘビを「龍蛇神」と呼び、神紋が「亀甲」のみである。つまり、神迎祭発祥の地である。

③ **インド洋周辺の低緯度地域に sada という地名があると考え調査し発見した。**インドの Nawada Sada の位置である。

④ **出雲神はインド洋周辺の低緯度地域からの渡来人である」説は証明された。**

⑤ 出雲以外の神社神紋[亀甲]は、文字通り亀信仰に由来する可能性があり、別途検討が必要である。

## 6 大野晋の「日本語は起源はクレオールタミル語説」



インドの Nawada Sada の場所は、大野晋氏(学習院大教授)がインド南方やスリランカで用いられているタミル語と日本語との基礎語彙を比較し、日本語が語彙(ごい)・文法などの点でタミル語と共通点をもつとの説を唱え、後に「**日本語の起源はクレオールタミル語説**」を唱えた場所である。今回の調査結果は**大野晋説と完全に一致し、大野晋説を補説するものである。**

タミル語はドラヴィダ語族に属する言語で、南インドのタミル人の言語である。インドではタミル・ナドゥ州の公用語である。世界で18番目に多い7400万人の話者人口を持つ。1998年に大ヒットした映画『ムトゥ 踊るマハラジャ』で日本でも一躍注目された言語である。

神名である倭迹迹日百襲姫(ヤマト・ト・ヒ・モモソ・ヒメ)もタミル語で解読できる。タミル語でツタや蛇瓜の意味を持つ語が日本語では蛇となっている。タミル語で蛇瓜を意味する tatt-an は日本では toto に変化し「ヘビ」を意味する。タミル語 maimai[崇拜の意]は日本語 mom-o と対応し、日本語に「ももす」という動詞があったと想定される。**倭迹迹日百襲姫は、ヤマトの「toto (ヘビ) 霊を崇拜する姫」となる。**

## 7 謝辞

インドの Nawada Sada という地名を佐藤和久氏が見つけてくれました。お陰で、「**出雲神はインド洋周辺の低緯度地域からの渡来人である**」と証明されました。

参考サイト 『Nawada Sada, インドの天気予報・世界各地の10日間の天気予報』

<http://ja.weather-forecast.com/locations/Nawada-Sada-1/forecasts/latest>

## 8 参考文献

- ① 『へび図鑑』 <http://baikada.com/pocketsnake/PC>
- ② 『日本動物大百科 5』 1996 平凡社
- ③ 『朝日百科 動物たちの地球 5』 1994 朝日新聞社
- ④ 『Pelamis platura』 <http://eol.org/pages/791184/overview>
- ⑤ 『ウミヘビ学入門 一海に生きるヘビ達』 <http://www.amsl.or.jp/midoriishi/0507.pdf>
- ⑥ 『出雲大社』 千家尊統 2012 学生社
- ⑦ 『家紋の由来』 [http://www.harimaya.com/o\\_kamon1/yurai/a\\_yurai/pack2/kikkou.html](http://www.harimaya.com/o_kamon1/yurai/a_yurai/pack2/kikkou.html)
- ⑧ 『佐太神社』 <http://www.sadajinja.jp/>
- ⑨ 『亀甲紋 国つ神のシンボルマーク』 <http://www.mmjp.or.jp/tajimamori/sub32.htm>
- ⑩ 『謎の出雲帝国』 吉田東洋 1980 徳間書店
- ⑪ 『山陰特有の民俗 竜蛇さんのすべて』 上田常一「蛇(ハブ)の民俗」『日本民俗文化資料集成 20』 1998年 三一書房
- ⑫ 『日本語とタミル語』 大野晋 昭和 56年 新潮社
- ⑬ 『龍神のウミヘビ起源 出雲神話と古代中国の盤古神話』 平井進『古代文化を考える第 53号』 2008年 東アジアの古代文化を考える会 同人誌分科会